



福島第一原発事故十周年にあたって

放射線から子どもたちを守る
三郷連絡会 事務局長 荒木浩二

地震、津波、原発事故による大災害をもたらした東日本大震災から十年目を迎えました。中でも稼働中の福島第一原子力発電所の1号機、2号機、3号機の爆発は、放射性物質を東日本に広くまき散らし、原発周辺住民に避難指示を出すなど未曾有の原子力災害となりました。「絶対安全」と言われて原発を受け入れていた住民にとっては十分な地震や津波への備えを欠いたための人災といえます。避難住民の数は福島県の集計によればピーク時に十六万五千人、今年一月現在では三万七千人とされていますが、市町村の集計では六万七千人に達すると言われています。福島第一原発の現状は、燃料デブリ

を大量の水で冷却し続けざるを得ず、冷却水量の制御もできていないため、汚染した冷却水の保管も限界に達しようとしています。廃炉作業も高い放射線量のため進んでおらず、終了時期は見通せていません。

このように社会的にも技術的にも原発事故は終了しておりませんが、一方で事故発生に関する国の責任を認める仙台高裁判決(二〇二〇年九月三十日)および東京高裁判決(二〇二一年二月十九日)が出され社会的認識の面では進展していることもあります。

しかし、福島県の子どもたちを中心とした被ばくによる健康被害についての調査で二〇〇人を越える小児甲状腺がんの発生がありながら、原発事故との因果関係がまだ明らかになっていません。しかもこの検査を縮小しようという動きが進行しており、企業および国の責任があいまいなまま被害者だけが取り残されるという危険性が増しつ

つあります。

現在、活発な地震活動が続いている中、事故処理が十分できていない福島第一原発や再稼働中の原発に再度規模な損傷を起こす事態が生じないとは限りません。東海第二原発の再稼働もこのような危機感をもって対処すべきと考えます。

私たちは、このように福島第一原発事故の本質的な解決に至っていない現状で、復興五輪だとか、新型コロナ騒ぎにより福島第一原発事故を過去のこととして葬り去ろうとする動きには反対の意思を表明し、福島第一原発事故の真の意味の後処理をきちんと完了するまで国と企業の責任を果たすよう要求するものです。



10年前、早稲田地域にも多くの放射性物質が降り注いだ

七五歳以上医療費の倍加法案反対!

政府は、年収二百万円以上(単身世帯の場合)、複数人世帯は七五歳以上の年収合計が三百二十万円以上の約三百七〇万の七五歳以上の高齢の医療費窓口負担を一割から二割へ引き上げる医療制度改革関連法案を国会に提出。国会で成立させ、来年度後半から実施しようとしています。

高齢者はもともと病気にかかりやすく、現行の一割負担でも七五歳以上の方は年収比で若い世代の数倍もの負担をしています。しかも収入の大半を占める公的年金は減らされ続け、負担を苦にした受診控えに加え、コロナ禍のもとでの受診抑制も広がっています。このような中での七五歳以上医療費二倍化は、受診抑制を一層進めます。病気の早期発見・治療が重要です。高齢者の健康を守るうえで重大な影響を及ぼすこのような法案には反対です。「七五歳以上医療費窓口負担二割化反対」の請願署名にご協力下さい。

友の会行事について 緊急事態宣言解除後も新型コロナウイルスの感染の増加が危惧されるなか、当面自粛します。よろしくお願ひします

コロナ禍で気づかされたこと

早稲田七丁目在住 長島韶子

コロナの発生は、有名人の突然の死亡、親しい人達との別れも出来ないなど、業病としかいえない恐ろしさにふるえるほどの衝撃でした。

決定的な治療もなく感染しないよう今までの日常としての行動も大きく制約されました。第九のレッスンや体操教室も中止となり、シヨップングや遊びでの外出、旅行はもちろん、会食すらままならず、クラス会も見送りに。

ほとんど自宅にこもり、マスクを手ばなせない、重苦しく口紅さえつけられない生活に追いこまれ、限られた行動をせざるを得ない状況です。これまで当たり前と思った生活から大きくかけはなれ、孤独感におそわれうつつぽくなりました。気がつくとも涙が溢れているのです。

こんな事ではいけないと庭いじりをしたり花を生けたりして体を動かすようにしました。自分がこんなに弱いと思った事は始めてです。

どうしてこういう事態になったのか、新型コロナウイルスのパンデミックは日常の暮らしの中で見失っていた真に

大切なもの、無くてはならないものの価値に気づかせてくれました。人との交流もせざるを得ない生活の中で改めて家族の存在のありがたさや近所の方々の声かけ、友人との電話での交流等などんなになぐさめられたかしれません。

なぜこのような恐ろしい病気が出現したのでしょうか。人間の都合で自然を破壊し資源を浪費して化学物質にかこまれ文明社会とはいいたい人間の所業が一因になっているような気がします。本当の豊かさとは、物質文明だけではなく平和な社会のなかで健康で自然を愛して調和の取れた生活の中にあるのではないのでしょうか。

若しかしたら立ちどまって本当に大事な物は何なのかを気付かせてくれるための出来事かもしれないですね。



花見客のいない公園

治水を考える会の学習会

二月二十七日、「江戸川の治水を考える会」初めての学習会が開かれた。講師は嶋津暉之氏（水源開発問題全国連絡会・早稲田三丁目在住）でコロナ禍の中十一名の参加で行われた。

①スーパー堤防（高規格堤防）が約三十年前に考案され、関東四河川、関西二河川の計画をたてたが実現性に乏しく江戸川は二〇年以上かけて2・1%しか出来ていないので完成まで六百年かかる。②江戸川の現状はキャサリン台風の時三郷あたりも氾濫しキティ台風で下流域が氾濫したが、その後江戸川は氾濫していない。住宅地に水があふれる内水氾濫は何回かある。理由は計画堤防が5mの高さがあり、利根川の水の三五%を江戸川に流す予定だが実際には江戸川の取水口より利根川の方が低いため二〇%程度しか江戸川に流れてこないためとのこと。③現在はあまりダムが必要がないのに国はまだダム建設に固執している。それよりも流域治水（氾濫の危険があるところの建築規制）や、河川の掘削と堤防の住宅側の補強が大事との話があり、質疑応答も含め一時間二十分くらいの内容の濃い講演だった。 木村 記

読んでみよう(7)

「無理難題が多すぎる」土屋 賢二著

文春文庫 2016刊 ¥590

著者（一九四四年生）はお茶ノ水女子

大学の教授を永年勤め定年退職した名誉教授。この先生の本に最初に出逢ったのは若かりし頃で、「われ笑う、ゆえにわれあり」と言うパロディ風の題名の本でした。よくご存じのデカルト（フランス哲学者）の『我思う、故に我有り』を連想し興味が湧き読みました、以来数十年興味のある20冊以上を次々と読み続けました。最近の短いエッセイの60編を集めた本の紹介です。物事の切り口や見方が変わるとこんなにも結論が変わるのかと思います。

例えば、運転免許の更新では、運転は好きだが免許を取っても殆んど更新だけで運転はしたことが無く、70歳を過ぎ更新時に運転が必要になりハタと困り①猛練習して更新する。②免許を返納する。③失効する前に免許証で金を借りられるだけ借り雲隠れする。の3択を考え種々トンデモナイことまで熟考して結論は「返納」と言う結果ですが、その過程が何とも言えない面白さが「土屋流」の決断です。60編の中に散りばめられた、これらの「ぐすりと笑える」「然り！と膝を打つ」「そんな馬鹿」「皮肉たっぷり」「冗談じゃない」は現在の混乱している世相を言い得て妙と言ふ事か。末尾の解説も価値あり。 久々湊 記